

良質な食用油がとれるなたね新品種「キラリボシ」

作物機能開発部 資源作物育種研究室 電話019-643-3655



研究のねらい

国産なたねの高品質化を図るため、カノーラ(カナダより輸入されるなたね)と同様にグルコシノレート含量が低く、かつエルシン酸を含まない、いわゆるダブルローの品種育成をねらいとする。

研究の成果

「キラリボシ」は、2002年に東北農業研究センター(岩手県盛岡市)において育成され、山形県で栽培されている。

成熟期(東北農研)は、「アサカノタネ」と同程度の“中生”であり、「アサカノタネ」に比べて多収であるが、「キザキノタネ」より低収である(図1)。

子実中にエルシン酸を含まず、かつ低グルコシノレート(14.6 μ mol/g)のダブルロー品種である(図2)。エルシン酸を含まないため、油は食用に適し、さらに、低グルコシノレートであるので、絞り粕は家畜飼料に適する。

乾物当たり含油率は43.4%で、「アサカノタネ」よりやや高いが、「キザキノタネ」よりはやや低い(図2)。千粒重は「アサカノタネ」並で、粒の揃いが良い。

「アサカノタネ」に比べて、菌核病抵抗性、耐倒伏性および寒雪害抵抗性が強い。

成果の利活用

東北地方南部の栽培に適する。

他の品種やなたねと交雑可能なアブラナ科作物とは充分距離を離して栽培する。

種子は無エルシン酸・低グルコシノレートが維持されているものを使用する。

越冬前の生育量を十分確保するために、適期播種を励行する。

過度の密植、多肥栽培は倒伏や菌核病の発生を、連作は根こぶ病などの連作障害の発生を招く恐れがあるので避ける。

詳細は<http://www.naro.affrc.go.jp/top/seika/2002/tohoku/to040.html>をご覧ください。

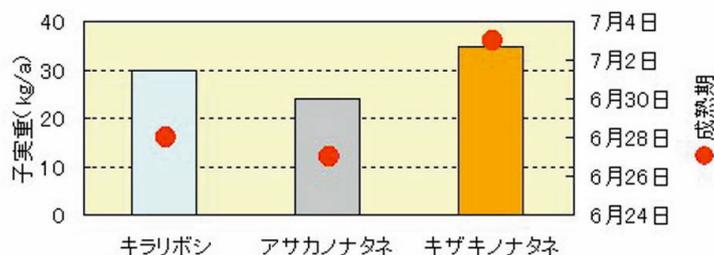


図1 「キラリボシ」の収量と成熟期 (東北農研1996~2000年)

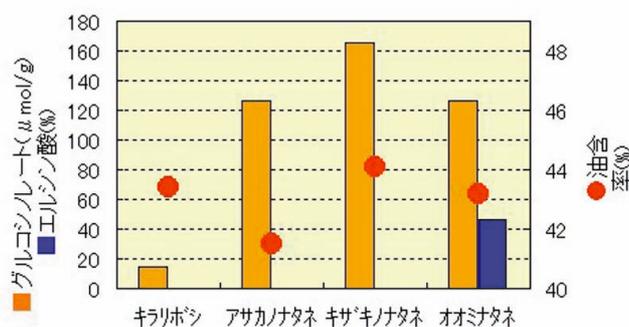


図2 「キラリボシ」の成分含量 (東北農研1996~2001(1998年))